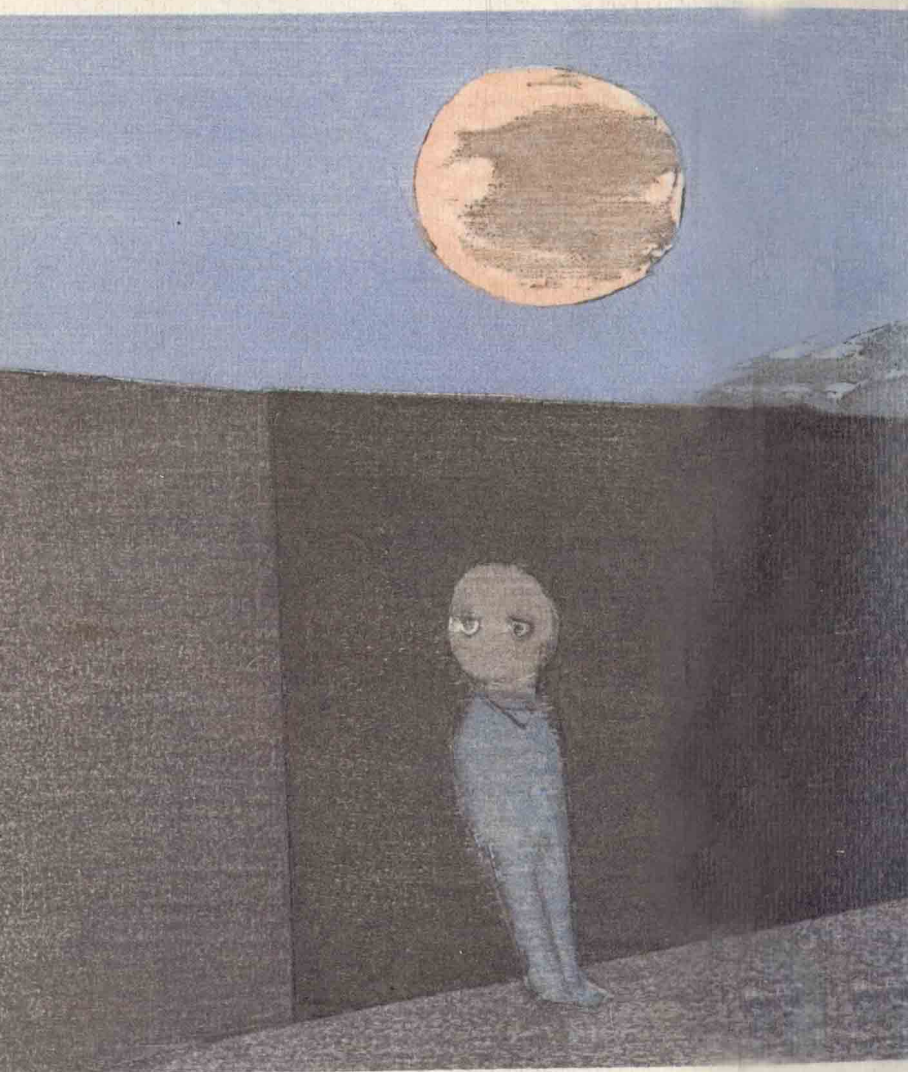


禁域 - 黒井千次



新潮社版

禁域 - 黒井千次

新潮社



禁^{きん}
域^{いき}

© Senji Kuroi, 1977 Printed in Japan

一九七七年一〇月五日 印刷
一九七七年一〇月一〇日 発行

定 価／九五〇円

著 者／黒井^{くろい}千次^{せんじ}

発行者／佐藤亮一

印刷所／株式会社金羊社

製本所／植木製本株式会社

発行所／株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(03)二六六―五一
編集部(03)二六六―五四

郵便番号 一六二

振替 東京四―八〇八

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

第一部	花鋏を持つ子供
第二部	果実のある部屋
第三部	闇に落ちた種子

禁

域

裝璜・清宮質文

第一部

花鋏を持つ子供

絵本で見る東郷元帥にそっくりの白髪頭の主人が立ち働いている酒屋と、足の不自由な、晒したような顔色のおばさんがいつも店に坐っている文房具屋の間を曲った道が、時として子供達の遊び場になることがある。

省線の駅から大通りを来て左へ折れるその道は、両側の地面の高さの異った変化のある道だった。大通りに面した酒屋と文房具屋は同じ地平に並んでいるのだから、折れた道を北に進むにつれて右手の土地だけが次第にせり上って来ることになる。右側の家は、はじめ目につかないほどの高さの石やコンクリートの上に塀を連ねているのだが、いつの間にかその土台の丈が増して大谷石の石垣が現われ、明史めいしの家の前あたりでそれは既に彼の顔の高さになり、更に進んで裏の通りに突き当る角では大人の背丈を越す程になる。そして石垣の上にあるのはいずれも大きな家で、しかも石垣が高くなればなるほど、敷地も広くなっていくらしい。

それに反して左手の低い側には、板塀と一つながりになった簡素な木の門の家が多く、似た

ような造りの二階家が並んでいるのだが、どことなくこせついた感じが強いのである。なぜか、子供達の家はいずれも道の左手、つまり申しわけばかりの庭がついた二階家の側に集中しており、深い階段を刻みこんだ石垣の上の家々はいつも樹木の多い庭の奥にひっそりと静まりかえっている。

裏通りの方へ抜ければ赤土の山や櫟の林のある広い原っぱが近いのだから、子供達は遊び場には不自由しなかった筈だ。それなのに家の前のあまり広くはない道が運動場になるのは、兄の晴人が学校の友達を何人か連れて来てそこで蹴球を始める時なのである。道幅いっぱいが競技場となり、真中与両端に三本の線が蠟石でひかれると準備は完了する。晴人達の喚声にひき寄せられ、近くの家々からもっと小さい子供が集まって来て更に選手の数が増加する。竹を編んだ垣根をのせている石垣の狭い縁によじのぼり、足を左右に開いて後手に垣根をつかみながら審判をしようとする子供が現われる。

幾つか年上になる小学生の兄の友達と蹴球をするのは明史にとって魅力的な遊びだ。小さいと思つて油断している相手の横を抜くボールを鮮やかに蹴ったりした時、喚声の中で明史は息がつまりそうなほど興奮する。その頃になつて現われ、自分の家の塀に背をすりつけたまま羨ましそうに競技を見ている隣の久夫に気づいたまま、明史はわざと声をかけてやらない。ボールが固いから、久ちゃんにはちよつと無理かもしれないよ、と口の中で呟いてみたりする。家の前で遊ぶのは、夕食ぎりぎりまで時間をたつぷり使えるからいい。自宅の少し遠い子供が帰りはじめても、久夫のように声のかかるのを待っているメンバーですぐ選手の補充が出来

る。日が落ちて、大気の中に薄い風の味がまざったようになってからの方がかえって身体が速く動く気がする。汗ばんだ肌が、夕闇の近づいたなめらかな空気になじみ、まるで水の中を素速く泳ぎまわっているみたいだ。

「あら、凄いわねえ。」

ゴールのすぐ後ろの戸がカラカラと軽い音をたててあき、南隣にあたる三輪の家のもう大人に近い娘が赤と黄の大きな矢絰の着物姿で声をかける。

「お、つおい、つおい。」

その声に刺戟され、明史は思わず両手をあげて晴人に叫ぶ。叫びながら、彼女が白い半紙をかぶせた皿らしいものを胸の前に捧げ持っているのに目をとめる。とんで来るかもしれないボールからかばうように、肉のついた丸い背で皿を包んだ秀子は塀伝いに子供達の競技場にはいつて来る。思った通り、彼女は明史の家の戸をカラカラとあけて道から消える。そこから秀子の張った高い声と、母のそれに負けまいとする甲高い声とが響いて来るのを明史は聞く。内容まではわからないのだが、からまり合った二つの声はお互いの語尾を噛み合うようにしながらいつまでも聞え続ける。秀子の声がふと低くなったような気がする。母の声がききとれない。まさか昨日のことを話しているのではないだろうな……。急に身体力が抜けて兄の足もとから転がって来たボールを蹴りそこなう。――買物に行くという秀子と共に大通りに出てしばらく歩いた後、日の出市場の前で明史は動かなくなつた。道を渡った二、三軒先に本屋がある。明史はなんとかしてその店に彼女をひき入れようとした。特別に欲しい本の目当てがあるわけ

ではなかった。ただ、うまくいけばずっと買ってもらえるかもしれない、なぜか突然彼はそう思ったのだ。それまで何かをねだるような親しきで彼女に接したことは一度もなかったのだが、だからかえってうまくいくかもしれない、と明史は勝手に考えたのだ。本屋は道のすぐ向う側で、彼の目いっぱいにくらんで見えた。あの中にはいつてしまえば大丈夫だ。意外なことに、路上に立ったまま秀子はどの方向にも動こうとはしなかった。黙って買ってあげたりしたら、明ちゃんのお母さんに叱られるから、というのが彼女の答えだった。拒絶に会うと、明史は道の上でいきなり自分が恥の柱になってしまったような気がした。それから抜け出るには、もう秀子に本を買ってもらう以外になさそうだった。おこられないよ、大丈夫だから、と彼は秀子の着物の袂を掴んで振る。頬のあたりに肉の盛り上った大人の顔がふっと表情を消すようにして遠くを見ている。そうすることで明史を突き放そうとしているのを彼は感じる。その顔の下に立ったまま、身体が道にこびりついてしまったような感覚と明史は闘わねばならなかった。自分が身体から出した赤黒い体液で道にはりついてしまっている。ねえ、いいじゃないよう、とくり返ししながら、自分の顔が卑しい笑いを浮かべ続け、その笑いが次第に顔を食いはじめるのを彼は意識する。買ってもらいたければお母さんに言えればいいじゃない。お母さんは、秀子さんに買ってもらってもいい、って言ったよ。でも、お姉さんはきいていないもの。沈んでいく夕日をなんとか持ち上げようとしているみたいなの熱く粘った気分が明史は包まれる。焦りがまぶたを火照らせる。けれど、身体の中から厚かましい要求を露出してしまった明史をその場におさえ続けるかのように、日の出市場の前から秀子は動き出そうとしない。どうしてここに

立っているのだろう、と明史は心のどこかでふとあやしむ。本を買ってもらうことはもう諦めた上で、明史は自らをどう処置したらよいのかがわからない。もし本を買ってくれたなら、それを家に持ち帰った時、母にいかにも報告すべきかについて彼は考えていた。ぼくはいらないといったんだけどお姉ちゃんが買ってくれちゃったんだよ……。神妙な表情でそう言えば、母はおそらく、ありがとうはちゃんと出来たの、ときくくらいのことだろう。そして大判の講談社の絵本は無事に家の中にはいりこむことになる。しかしどういうわけか、買ってくれなかった時のことについては彼は全く何も考えていなかったのだ。次第に口重く黙りこんだまま、明史は秀子の下に立ちつくすことしか出来なかった――。

「行っただ、明史。」

古びた板塀の色が溶けて漂い出した夕暮れの向うから兄の声が明史を打つ。ゆるく転がって来るボールを待つて蹴ろうと身構えた時、横から跳び出した小さな影が明史の顔面にいきなり白い炸裂を叩きつける。右の頬の上にもう一つの頬が重なってしまったかのような歪みを顔に分厚く張りつけたまま明史は思わずしゃがみこむ。涙はにじみ出てくるのだが、不思議に痛みは感じない。今ボールを蹴ったばかりの兄の友人をはじめ、幾人かの子供達が様子を見に集まって来る。道の上に小さな黒いテントを三角形に張ってその中に自分はいりこんでしまったみたいだ。お母さんともかく、もしお父さんに知られたら――黒いテントの中で明史は考える。従妹の俊江のチャーハンに匙を突きたてただけであれだけおこられたのだから。あいていていて、と大げさに声をあげながら自分の足を両手で持って片足跳びしている子供がいる。

けんけんで二、三度くるくるまいをしてから、その子供はうつむいたままの明史の顔の下に自分の運動靴をさし出してみせる。

「おおいて、みてくれよ、俺なんか穴があいてるから爪で蹴っちまったよ。」

西津は小柄だけれど兄の仲間の中で一番敏捷で逆立ちのうまい友達だ。足には小さ過ぎるらしい運動靴の親指の爪先あたりにはつれたような穴が見えるのだが、実際にそこから爪がのぞいているわけではない。それでも、年上の加害者がそれだけおどけて自分の被害を見舞ってくれていることに明史は満足だ。——その日、明史達の一家と俊江の家族とは省線の駅で持ち合わせて新宿に出た。遅い昼食に中村屋にはいった時には、時間がずれていたためか子供達はすっかり腹を空かせてしまっていた。運ばれて来たチャーハン是小ぢんまりとした山でしかない。たちまちそれを食いつくした明史は兄の皿を見た。空の皿を前にして、兄は薄暗い店内をあちこち見廻している。隣の俊江をのぞきこんで明史は驚いた。まだ半分も食べていなかったからだ。おなか为空いていないのか、と彼は俊江にたずねた。小さな頭を横に振って彼女は匙を口に運んだ。食べ切れないのか、と彼はまたたずねた。彼女は頬をふくらませながら水のコップに手をのばした。残すのだろう、と彼は念を押した。両手に水のコップを持ったまま彼女は答えない。結果はあまりに明らかだ。明史は空の皿にあった自分の匙をとりあげた。俊江のけたたましい泣き声が始った時、明史は彼女の皿からすくい取った一匙のチャーハンをまだ口に入れていなかった。前の席に坐っている父の二本の指が激しくテーブルを叩いた。カテが食卓に手をかけようとしたり、のび上って皿のものの匂いを嗅ごうとしたりする時に父が示す、あの

身振りだった。明史を睨みつけた目は動かさずに、父は無言で首を左右に振った。勢いに驚いた明史は慌てて匙のものを口に押しこむと俯いた。可哀そうにまだおなかが空いているのね、と伯母が言ってくれたのがせめてもの救いだった。家に帰ってその日買ってもらった「木馬の冒険」の絵本を読んでいると、後ろに立った父が言った。今日お前がやったことは、行儀が悪いというだけではすまない一番卑しいことだ。他人の食べ物に手を出すのは、動物しかやらない恥かしいことだ——。きいていると、自分のしたことがとめどもなく卑しく恥かしいこととして生命を与えられ、改めてそれを父から手渡されているように思われた。というより、むしろ明史の恥をひそかに食べたがっているのではないか、とさえ感じられるほどの異常な昂ぶりを父は示した。手の中の本の世界がたちまち色褪せて遠のいていくのを明史は見た。父は襖の前に黒々と立っていた——。横から腕を持ち上げるようにして強引に顔をのぞきこんだ兄の晴人が、ウソンキ、ホンキ、とたずねながら明史の身体を石垣の下に運ぼうとする。その声の調子には、しかし安心した上で少しからかうような響きがにじんでいる。質問にはわざと答えずに、黒いテントごと明史は兄に身をまかせて道の横に運ばれる。そこにうずくまっていたのは競技の邪魔になるからだ。石垣と板塀にはさまれたグラウンドから膝をまげたままの明史が後方に運び出されると、誰かが、もうやめよう、と声をあげる。障害物が排除された後のグラウンドに横倒しになっている夕暮れを見て、もう遅いことに突然気がついたのだ。道端の塀の窪みにある井戸の周辺に子供達が集まって来る。手を洗うもの、水を飲むもの、脱いだまま塀の隅に出ばっているポルトの頭にかけてあった服をとろうと背伸びするもの。そこには、自分

とは明らかに違った年上の世界があるのを明史は感じる。大丈夫か、というもう一声が欲しくて明史は右の頬をおさえながら水音の弾ける井戸端に近づいていく。ポンプの周囲に寄り集まっていた背中が急に重なって厚みを増すような気がする。夕靄の中に一段と濃い澱みが生み出され、それが一匹の生き物のようになって石の流しのあたりを動いている。「赤マント」という押し殺した声がそこから洩れて明史にとどく。

「池袋の駅でな……。」と言ったのはボールを明史の顔に蹴りつけたあの小柄な四年生の西津だ。

「目白にも出たんだぞ。」とかすれた別の声がする。

「電車で通っている女の子がさ、駅の便所にはいるうとしたらな……。」

便所の中から突然赤マントが現われて女の子を連れて行こうとした。それに気づいた乗客が騒ぎ出し、巡査も駆けつけて追跡したが、階段からホームへと追いつめたところで赤マントはふっと消えてしまったのだという。

「その子は連れていかれなかったの？」

輪の外から明史はたしかめてみずにいられない。そうみたい、と短く答えてから、西津は寄せられた仲間の顔を見て大きく息を吸う。

「便所に行こうとしてさ、戸をあけたら中にいたんだから……。」

「それ、いつだ？」

「昨日、おとといかな。」